

3-6 新安全基準への異議 (その4)

過酷事故時の緊急対応はどこまで可能か

福島第1の事故時に現場で緊急対応に当たった人びとの活動状況が少しずつ知られるようになった。最近12月に出た本として次の3冊がとくに現場の当事者の動きを生々しく伝えている。

- 1) 朝日新聞社(奥山・小此木・木村・杉本)『検証 東電テレビ会議』朝日新聞出版
- 2) 門田隆将『死の淵を見た男—吉田昌郎と福島第1原発の500日』PHP研究所
- 3) 舘野淳『シビアアクシデントの脅威』東洋書店

1. 問題の所在

わたしの関心事は、予期せぬ非常事態が発生した時に、当事者たち(各個人および組織)がどの程度まで有効に対処できるのだろうか、という問である。専門家の間では、東電の組織がメルトダウンに対する備えを全然していなかったことへの厳しい批判があり、3月11日15時37分の津波襲来による全電源喪失時に、メルトダウンの予想ができて、もっと時間を有効に使っていたら、3号機の爆発(14日11:01)、2号機の破損(15日6:15)を防げたのではないか、という意見がある(注1)。

もうひとつ認識として重要なことは、4号機の使用済み核燃料プールの中に偶然水が満たされて、大爆発に至らなかったという神の恵みとしか言い様のない幸運に恵まれたという事実である(注2)。福島第1の中で曲がりなりにも現場作業チームが踏みとどまって事故対応が出来たのはこの幸運による。そうでなければ、今頃東京圏は人が住めなくなり、当時の菅首相が懸念したように「日本崩壊」が発生したであろう。

つまり、「東電のようなぬるま湯の組織ではなく、きちんとした組織力と機動力を備えた組織が事に当たれば、事故はこれほどまでの大惨事にいたらなかったはずだ」という言説がある一方、「この程度で収まったのは、まったくの偶然の重なりに救われたのであって、一歩間違えればチェルノブイリ級の核物質放散が発生して日本の東半分が立入禁止区域になった可能性がある」という指摘もある。

2. 現場からの感想

『検証 東電テレビ会議』は、第1章で、プラントの消防ポンプを動かせる人員を下請け企業に頼っているために、人・ポンプ・水源が間に合わないで慌てている様子が記されている。第2章では制御盤の電源を生かすために車のバッテリーをかき集めてつないだりしている。第3章では所長に余分な仕事をつぎつぎと本店が要求したりして、ますます現場が混乱していく模様が記されている。

たしかにひとつひとつの現象を読んでいくとそれぞれの現象にあと知恵で批判したくな

るが、わたしのささやかな経験からすると、これが普通の姿だと思う。少なくともわたしには、この人たちに「もっと上手にやれたはずだ」と言う自信はない。現在、わたしはトラブル続きの現場を抱えていて、年末から正月第1週に現場へ詰めて働いており、あと知恵で言えば「なんてバカな設計や施工をしたものだ」と臍を嘔むことが多いが、すでに出て上がっている設備の制限条件に縛られて迅速な変更ができない。身はドタバタしているが、実態はもどかしい。

東電本店と福島第1という組み合わせが、もしほかの組織の組み合わせであったらもっとうまく事故対応できたであろうか。様々な偶然も含めて、似たりよったりの結果になるのではないか、というのがわたしの感想である。

3. 原子力規制委員会の仕事

去る9月に原子力規制委員会および原子力規制庁が発足して、新安全基準を策定し、それによって各原発を再審査して、合格したものを再稼働させるという手順を進めている。

その中には、予備の非常用発電機や防潮堤を設けるという物理的な設備増強もあるし、従来日本では起こるはずがないとしてきた過酷事故対策（予備の消防車・ベントフィルター・免震重要棟・非常時の組織体制など）をも盛り込んでいる。

これらはたしかに福島の教訓を取り込んでひとつひとつの現象に対する対処にはなるであろうが、事故の規模や性質が同じ方向から来るとは限らない。どんな想定を立てれば良いかを考えると、無数の可能性がある。

そのことを優先順位をつけて対策して原子力発電所という物理的な存在にするために、今まで、確率的な順位付けをしてきた。そして、福島ではその推論があまりに切り捨ての多いものであったことがあらわになった。また、スリーマイル島・チェルノブイリ・福島と三つの過酷事故（メルトダウン）を経験した今となつては、30年に一度は世界のどこかで事故が起こることが実証された。したがって、事故時の費用負担を棚上げにした従来のコスト比較は意味を失ってしまった。

4. 結論

わたしは原発を直ちに全廃しても電力供給に問題はないと考えている。

自民党政府や経済界が唱える利権がらみの原発再稼働論は厳しく排除していかなければならない。

しかし、一群の良心的な段階的縮小論者がいる。この人たちに対しても、プラントというもの、そしてそれを運転する組織というものは、いくら設備を増強しマニュアルを整備しても非常時には不本意なドタバタで思うようにいかないことと、原子力プラントにおける核反応のエネルギー密度が桁違いに大きいことによって、事態の進展が日常感覚を超えて素早く、そのゆえに福島の再来が容易に起こりうることを訴えたい。

注1. 朝日新聞社、前掲書、P.112

館野淳、前掲書、P.126

注2. たとえば、『想定外の偶然』の重なりで救われたに過ぎない4号炉使用済み核燃料プール」<http://doujibar.ganriki.net/fukushima/morotome-Fukushima4.html>

注3. 近藤駿介原子力委員長が菅首相に提出した「最悪のシナリオ」

<http://nucleus.asablo.jp/blog/2011/12/24/6260164>

当事者の吉田昌郎所長は、格納容器の爆発が起きると、福島第1・第2の計10基の原発が制御不能になることから、チェルノブイリの10倍の放射性物質の放出を想定したという。また、班目委員長は、東海第2も放棄されて、日本は北海道・汚染地域・西日本に3分割される可能性を考えたという。—門田、前掲書、P.356

(2013年1月3日 筒井哲郎)